

# ココカヌエネ

こえを、きこう

アイヌ遺骨返還請求訴訟

2013年4月19日

第3回口頭弁論における

小川隆吉原告の意見陳述書(抜粋)

アイヌ遺骨  
返還請求訴訟  
ニュースレター

No.03 ver.2

2013年6月14日  
北大開示文書研究会

## 1 杵臼墓地

私は昭和10年に杵臼で生まれまし  
た。アイヌとして生まれ育つたの  
ですが、親やまわりの年寄りには、アイ  
ヌの暮らし方や風習、伝統といった  
ものを子供の私には見せないよう  
にしていました。葬式もアイヌ式でし  
ていたようですが、夜、こっそり、  
こどもの目の触れないようにして  
ました。差別を受けないようにとの  
年寄りたちの配慮です。

今、この裁判で一緒に原告となっ  
た城野口ユリさんたちは、近所に住  
んでいました。

ある日、私の母が、灌漑用水路に  
かがんで洗い物をしていて、間違っ  
て落ちて死んでしまいました。私が  
11歳のときです。このとき、ユリちゃん  
のお母さん、マツさんが、私を抱  
いて泣きました。マツさんは、その  
当時、コタンのリーダーでした。私  
の面倒をよく見てくれました。

母は杵臼のアイヌ墓地に埋葬され  
ました。

けれども、杵臼での生活や杵臼墓  
地のことは、長い間、記憶から消す  
ようにしてきました。

この杵臼の墓地に私の曾祖父母、  
エカシ・フチが眠っていたのです。  
わかっているだけでも10名以上で

す。小川伊多久古禮が亡くなったの  
は明治38年6月3日、フチカシユが  
亡くなったのは昭和6年4月1日  
です。それらの骨はすべて北大に持ち  
去られました。

昭和49年、兄の清治郎が杵臼に新  
しい墓を建てました。清治郎が本州  
へ転居の後は、私が妻や子供たちと、  
毎年夏になると、草取りをしたりお  
酒をあげたりして先祖を供養してき  
ました。

## 2 北大医学部動物実験室

昭和56年9月16日、貝沢正、野村  
義一、杉村京子、佐藤幸雄、葛野守  
一、小川隆吉の6名が医学部3階に  
案内されました。その部屋の壁一面  
に、頭骨があつたのです。

右から、エゾオオカミ、シマフク  
ロウ、そしてそれらに並んでアイヌ  
の頭骨がありました。動物の骨と並  
んでアイヌの頭骨が並んでいたの  
です。アイヌ頭骨には、ナンバーと  
ドイツ語の文字が書かれていまし  
た。

旭川から来た杉村京子さんはこ  
れを目にして、床にひざまずき、  
「許してください、許してください  
……」と3度、叫びました。3度目

# こえを、きこう

## コカヌ エネ

は、声をつまらせていました。

そして、何にも持たずに来たことを詫び、近くに立っていた佐藤君に、「タバコ、ロウソク、お線香を急いで買ってきてください。」と言いました。

佐藤君がビニール袋に入れて持ってきたものを見た北大職員から、「こは火気厳禁です」と告げられたが、皿を使い、巻煙草にライターで火をつけて供養をしようと思いました。なんとも言えない怒りで、目の前が見えなかったことを今も思い出します。

上記の実態を現アイヌ協会本部に知らせるきっかけを作ったのは、北海道日高郡厚賀町出身のアイヌ、

海馬沢博士<sup>かいばさわ</sup>でした。北大獣医学部の卒業で、当時、自治労の副委員長でした。今思えば、私は、海馬沢氏の思いと遺志を受けついでこの裁判を起したのです。そのことを裁判長にはつきり伝えます。

上記の実態は放置できない、せめて地上に下ろすべきだとの協会の声を大学は無視できなくなりました。そこで、医学部駐車場に、建物面積は74㎡、工費は1640万円という見積もりで、納骨堂を建てることを文部省に申請したのです。

請負業者が決まり、足場が立ち、建物名が書かれた看板が立てられました。そこには、なんと、「北海道大学医学部標本保存庫新設工事」と書かれていたのです。

なぜ、このようなことをするのかと現場工事請負業者に聞いたのですが、大学に聞けというばかりです。

北大に聞くと、この工事は国の事業で、3年後に行なわれる会計検査が済むまでは変更はできないといいます。

ここから、文字通り、北大の二枚看板の始まりです。北大は、アイヌ納骨堂として建てた建物が、宗教色が強い建物は建てられないという理由によって、表向きの看板には、「医学部標本保存庫」としたのです。先

祖の骨が標本室と書かれた建物に置かれているという事実はいへんに屈辱的でした。そして、また、この中にいったいどのような骨があるのか、その内容も知らされないままでした。

### 3 アイヌ人骨台帳

私が北海道大学にアイヌ人骨台帳の存在を知ったのは、今から5年前の平成20年のことです。1月10日、10時10分、私の携帯電話が鳴りました。

「小川さん、元気ですか？ ぼく、北大医学部の学生です。小川さんが探していたアイヌ人骨台帳と思われるものが見つかりましたよ」との声に、私はびっくりしました。

「まさか…、本当か?!」  
「ぼくは嘘はつきません」

11日の朝一番、スクーターで北大事務局に飛び込みました。9時30分でした。2階部長室で林副学長と名刺交換しました。

「アイヌ人骨台帳があると聞いてきたが、本当か」と尋ねました。林副学長は、「ありました。しかし、あのままでは外部に出すのは難しい」というのです。

小川隆吉さんや城野口ユリさんの訴えを、インターネット動画でご覧いただけます。  
北大開示文書研究会のサイト <http://hmjk.world.coocan.jp> からどうぞ！



シンポ「先住民への遺骨返還は世界の流れだ」 発言2 小川隆吉さん



シンポジウム「先住民への遺骨返還は世界の流れだ」 発言1 城野口ユリさん

私が、「あのままとはどのようなことを指すのか？」と聞いたところ、「記述内容に差別的なものがあつた」と話され、「時間がほしい」と付け加えました。

もう待ってられないとの思いで、その3日後に情報開示請求の手続きをスタートしました。ここでも、待ってくれ、待ってくれのオンパレード。

しかも開示されたのは、とても台帳とは言えない、ワープロで入力された簡単なリストです。この元となった「台帳」を出して欲しいと北大に請求したが、「そんなものはない」の一点ばりです。

もう我慢できない。そこで、異議申し立てをしたところ、9月には申し立てが認容され、アイヌ人骨に関する文書がなんと27点も開示されたのです。その中には、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」という手書きの台帳もあり、そのときは、これこそ探

していた「台帳」だと喜びました。しかし、この3月に北大が出したアイヌ人骨についての調査報告書には、台帳の原本である「発掘人骨台帳」というものがあつて、それが平成20年、私が開示請求をしたときに医学部にあつたというのです。嘸然とするほかありません。

北大には、「虚偽」と「隠蔽」しかありません。真実に近づいための学問の府とは、正反対です。児玉作左衛門の時代だけではなく、今もなお、アイヌに対して侮蔑に満ちた態度しか取れない、これが北大です。このような研究者に、大切な先祖の骨を保管させておくことはできません。

#### 4 無条件での返還と謝罪を

若いとき、記憶を消そうとしたアイヌの暮らしや伝統、そしてアイヌ

の墓は、私と家族にとって、そしてアイヌにとって、かけがえのないものです。

墓からの盗掘がいかに罪深いものか、学問の自由とは何か。人間の静かに住む大地、アイヌモシリが奪われ、死者の人骨まで奪われる。それを返そうとしない北海道大学に限り、ない怒りを私は表明します。ただちに返してください。無条件で。

北大と国立科学博物館と政府は、盗掘されたアイヌ人骨を白老に移送し、そこで「慰霊」をすることによって大学の全責任を免れ、しかも新たに遺伝子研究の材料にしようとしているのです。この態度が一番許せないのです。過去をうやむやにする姿勢が許せないのです。

この裁判で、先祖の人骨を取戻し、北大が行なってきた罪悪をすべて明らかにしていきたいのです。

# 北海道大学の アイヌ墓地発掘事件

日本社会教育学会理事（北海道）

清水裕二

北海道には「アイヌ墓地発掘問題」があります。日本社会教育学会の諸先生方はご存知でしたか？

明治時代より戦後に至るまで、北海道はもとより樺太・千島のアイヌの墓地から人骨と副葬品の発掘（盗掘）と収集が行なわれました。その多くは北海道大学医学部の主導で行なわれ、1500体弱のご遺骨が北

大医学部で研究・調査され、多くの解剖学者や博士が誕生したものと推察されます。

1980年初頭より、当事者アイヌはもちろん、北海道ウタリ協会（現・北海道アイヌ協会）などの抗議や返還要請が継続されました。が、北大は校内の一角に「アイヌ納骨堂」（当初は「北海道大学実験動物資料庫」と表示していました！）を建立しただけで収拾を図ろうとし、現在もなお収蔵し続けております。

しかし、発掘を巡る経緯も真相も、今後遺骨をどうするのかなどの展望も、何も明らかにされておりません。

アイヌの小川隆吉氏は2008年から、北海道大学に「アイヌ墓地発掘問題に関する文書」の開示を求めて交渉を続けています。大学側は「それなりに」関連文書を開示しました。小川氏を中心に市民が集い、それを読み解く研究会を設けて研究・調査を深めています。その結果、小川氏の故郷である日高地方浦河町での「被害」実態が明らかになりました。昨年9月には同町在住の遺族3人が原告となつて北大を提訴し、現在も遺骨の返還を求めて裁判を闘っています。

2013年6月8日、筑波大学での日本社会教育学会全国理事会での報告から。

# ラムトウナシ きいて、始める。

## 学者らによる主なアイヌ墓地「人骨発掘」

### ○幕末の盗掘事件

1865年 英国人が森町4落部13

1867年 森町の遺骨？返還

### ○小金井良精教授（東京帝国大学）の発掘

1888年 坪井正五郎と北海道旅行中→80体発掘

1889年 妻と2回目の北海道旅行中→80体発掘

### ○清野謙次教授（京都帝国大学）の大量発掘

○児玉作左衛門教授（北海道帝国大学）の大量発掘

○北海道大学などによる戦後の発掘

アイヌ遺骨返還請求訴訟ニューズレター第3号

発行日 2013年6月14日

編集発行 北大開示文書研究会

共同代表：清水裕二、殿平善彦

〒077-0032

北海道留萌市宮園町3-39-8（三浦忠雄方）

TEL（FAX）0164-43-0128

<http://hmjk.world.cocan.jp/index.html>

電子メール [ororon@jade.plala.or.jp](mailto:ororon@jade.plala.or.jp)

アイヌ遺骨返還訴訟原告へのご支援は、北大開示文書研究会が窓口を開いています。

ゆうちょ銀行振替 02790-1-101119